

地域スポーツクラブにおける 自主的運営行動の可能性と限界

佐藤 充宏*, 三河 恭普**, 大橋 美勝***

SOCIAL CHARACTERISTICS OF VOLUNTARY MANAGEMENT IN COMMUNITY SPORT CLUBS

Mitsuhiro SATO*, Yasunori MIKAWA** and Yoshikatsu O'HASHI***

Community sport clubs are supported by club managers who include instructors, coaches, accountants and others. Their involvement in sport clubs were characterized by voluntary, gratuitous and public beneficial action which are supposed to be important for developing community club service.

The purpose of this study was to investigate the difference in the involvement among managers from Women's Volleyball Clubs (WVC), Junior Sports Clubs (JSC) and Gateball Clubs (GC) in Tokushima and Okayama prefectures.

The results are summarized as the followings:

- 1) Though managers devoted themselves to their club members, they had little interests in the comanagement with other club managers and in the organization of sport clubs in the community.
- 2) Most managers thought it unnecessary to be awarded money for their management.
- 3) Most managers thought they were too busy in handling works related to club management. They hope all members to participate in club management.
- 4) Managers felt the next three to be a burden; less devotion to their own occupation or less time to spend with their family, the difficulty in recruiting participants and the difficulty in coordinating different opinions among participants.
- 5) Managers thought it worth being involved in club management. It was because they could have chances to be acquainted with a variety of people, to grow themselves up as a community volunteer and to get members' trusts.

Key words: community sports, sport volunteer, voluntary association

*徳島大学総合科学部 スポーツ社会学研究室

**徳島県那賀川町役場

***岡山大学教育学部 体育社会学研究室

はじめに

労働時間の短縮や学校五日制により、日常生活の自由時間が増加してきた。私たちにとって、この自由時間をいかに人間らしく生きるかが重要な課題である。地域スポーツクラブはこの自由時間における生涯学習の活動の場として注目され、今後の発展が期待されている¹⁴⁾¹⁵⁾。しかし、現在の地域スポーツ組織だけでは、多様な住民のスポーツ要求を満足させるだけの受け皿を持っていない。今後の地域スポーツの振興を推進していくには、現在の地域スポーツクラブをどのように変革し育成していくかが重要な研究課題である。

日本における地域スポーツの振興は、多くのボランティア・スポーツ指導者の手によって育まれてきた¹⁴⁾。この運営者の自主的運営能力の開発、活用が、今後の地域スポーツの発展の重要な鍵を握っている。スポーツにおけるボランティアについての研究は、大きく三つの領域に分けることができる。松本ら(1992)のイベント参加型ボランティアを対象とした研究⁷⁾、小久保(1993)、松尾ら(1994)、末廣ら(1994)の地域スポーツ指導者の自主的運営を対象とした研究⁸⁾¹⁰⁾、綿(1992・1994)の障害者スポーツなどの社会福祉領域のボランティアを対象とした研究²³⁾²⁴⁾の三領域である。いずれの研究も、まだ始まったばかりで体系化されたものは少ない。徳永(1993)は地域スポーツクラブにおけるボランティア行動を、クラブ指導援助に無償で取り組む個人的なボランティア行動と、交流大会の開催や他の地域行事の援助等のクラブ全体のボランティア行動に分類して定義づけている²⁰⁾。本研究では、前者の個人的な地域スポーツ運営者のボランティア性に着目し、地域スポーツ少年団(JSC)運営者、家庭婦人バレーボールクラブ(WVC)運営者、ゲートボールクラブ(GC)運営者のおかれている状況を比較検討しながら、地域スポーツ運営者の自主的運営行動の可能性と限界について検討することが目的である。

方 法

対象者

徳島県及び岡山県のスポーツ少年団代表者/指導者、家庭婦人バレーボール代表者、ゲートボールクラブ代表者1387人を対象に質問紙郵送法の調査を行い、回収された849人(62.9%)。

分析枠組み

運営行動の許容範囲を規定する最も強い要因と考えられるものは、所属するクラブの活動形態であると考えられる。運営者になった人は、自分が観察してきた前の運営者の行動役割を取り入れるか、あるいは自分の過去の運営経験を取り入れ、自分自身をクラブの運営者として対象化することでその役割を遂行していく。自分の運営観念と実際の運営行動による満足感や負担感が強い規定要因になると考えられる。本研究では、運営者自身の運営行動規範を、形態、経費の二つのレベルで評定してもらい、各団体の自主的な運営行動の特徴を検討する。

手続き

調査項目は、ボランティア行動を規定する運営状況に関する項目を、山本・中島ら(1989)、桑野・佐伯ら(1985)の研究文献²¹⁾⁴⁾を参考に図1のように決定した。また、運営行動規範の

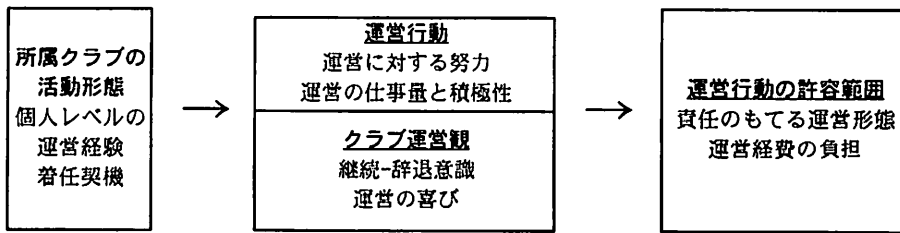


図1 本研究の分析枠組み

測定にはジャクソン (Jackson, J. M. 1965)²⁾や、佐々木 (1966)¹⁶⁾の社会的是認可能モデル (Return Potential Model) を援用した。調査は、徳島県及び岡山県の WVC, JSC, GC の協会の代表者名簿に掲載されている 1387 人を対象に質問紙郵送法で配布回収した 849 人のデータを分析した。調査期日は 1993 年 11 月である。

結 果

1. 各団体の活動形態と運営者の幹部経験，着任契機

表 1.1 にクラブの活動形態を示した。WVC と JSC では約 95% のクラブが定期的に活動している。GC では 61.1% と他に比較して割合が低い。 χ^2 検定の結果、この関係には有意な差がみられた ($\chi^2=148.02$ df = 2 $p<.001$)。クラブ運営の人数では全体的な傾向としては「3~10 人」という回答が多かった (66.8%)。WVC では「2 人」と回答したものが 23.7% いた。クラブメンバー数では、WVC ではメンバー数が 15 人以下のクラブが 62.3% と他の 2 つのクラブと比べて多かった。JSC ではメンバー数 16~50 人のところが 67.2%，GC では 100 人以上という回答が 36.1% と最も高い割合を示した。クラブ目標では WVC と JSC では「試合に向けて競技力を強化」することを目標としている団体が多く (73.7%；60.8%)，逆に GC では「日常のゲームを楽しむ」ことを目標においている団体が多かった (60.0%)。この関係には有意な差がみられた ($\chi^2=64.47$ df = 2 $p<.001$)。

表 1.2 に幹部経験年数と運営者着任の契機の結果を示した。幹部経験においては、WVC が 75.0%，JSC が 81.4%，GC が 80.1% であった。経験年数の平均は、WVC が 8.6 ± 8.2 (Mean \pm S.D.) 年，JSC が 10.4 ± 7.8 年，GC が 10.6 ± 8.8 年であった。WVC と JSC, GC の間には有意な差がみられ、WVC では全くの未経験者でも運営者として参加している場合があった。

運営者に着任する契機についてはクラブ間で違いがみられた。JSC では「知人に頼まれて」が 51.5% と最も高く、次いで「世話する人がいなくてしかたなく」(29.1%) が続いている。GC では「メンバーに運営能力を認められて」が 55.4% で一番高く、「他のことで運営経験がある」が 32.8% で次に高い割合を示した。WVC では「順番に役割を交代しているため」が 33.8%，「世話をする人が他にいないのでしかたなく」が 30.3% と消極的な意見が高い割合を示した。この関係には有意な差が認められた ($\chi^2=276.86$ df = 16 $p<.001$)。

2. クラブ運営行動

1) 仕事内容

WVC 運営者の主な仕事は「会議出席，行政交渉」，「メンバーへの連絡」，「他のクラブと試合の交渉」である。JSC 及び GC の運営者は「技術指導」，「会議出席，行政交渉」，「年間活動計画，運営」が中心的な仕事である。回答率 40% 以上の項目から仕事量を見てみると，10

表 1.1 各クラブの活動形態の比較

		単位 (%)		
	回答項目	WVC (n=236)	JSC (n=451)	GC (n=180)
活動日	定期	94.9	95.6	61.1
	不定期	3.0	3.8	32.2
	不明	2.1	0.7	6.7
月活動数	～5回	41.5	19.7	40.0
	6～10回	53.4	34.1	17.7
	11回～	0.4	40.6	28.9
	不明	4.7	5.5	13.3
運営人数	1人	2.5	1.8	2.2
	2人	23.7	5.8	8.3
	3～10人	61.9	74.5	43.3
	10人～	8.1	16.9	38.3
	不明	3.8	1.1	7.8
メンバー数	～15人	62.3	16.2	16.7
	16～50人	36.4	67.2	27.2
	51～100人	-	12.6	10.0
	101人～	0.4	2.7	36.1
	不明	0.8	1.3	10.0
目標	競技会志向	73.7	60.8	33.9
	日常ゲーム志向	24.6	34.8	60.0
	不明	1.7	4.4	6.1

表 1.2 運営者の役割と着任契機

		単位 (%)		
		WVC (n=231)	JSC (n=447)	GC (n=177)
運営者の幹部経験				
	あり	75.3	81.4	80.1
	なし	24.7	18.6	19.9
運営者着任の契機				
	知人に頼まれて	19.5	51.5	25.4
	メンバーの推薦	28.1	19.2	55.4
	行政からの打診	4.3	6.5	11.9
	世話人がいない仕方なく	30.3	29.1	27.7
	輪番制のため	33.8	9.6	2.3
	押しつけられて	8.7	6.0	13.6
	運営経験があるため	13.9	16.1	32.8
	年長者のため	16.9	5.4	5.1
	その他	7.8	20.1	6.8

注) 「運営者着任の契機」の項目の回答は重複回答である

表 2.1 運営者としての仕事

	単位 (%)		
	WVC (n=231)	JSC (n=447)	GC (n=177)
運営者の役割			
技術指導	28.4	84.7	70.9
活動計画・運営	40.1	61.3	69.8
会議出席・行政交渉	83.6	65.3	78.8
会計	16.8	10.0	19.0
レクリエーション行事の運営	15.1	27.8	40.8
メンバーへの連絡	75.9	33.6	61.5
対外試合交渉・運営	64.7	53.8	46.4
スポーツ用具管理	20.3	25.8	22.3
メンバー間の人間関係調整	48.7	38.7	55.3
その他	1.3	1.3	3.4

注) この回答は重複回答である

表 2.2 運営者として努力している内容

	単位 (%)		
	WVC (n=224)	JSC (n=447)	GC (n=179)
専門誌等で指導運営の勉強	8.0	46.8	49.2
研修会に参加して勉強	33.9	62.6	83.8
他の指導者と交流するよう心かけ	43.3	72.0	73.2
メンバーの意見を受け入れる	83.5	52.8	73.2
体協や行政の協力を依頼している	23.7	28.9	53.1

注) この回答は重複回答である

項目中、WVCは6項目、JSCは4項目、GCは7項目あり、クラブ内の運営や、対外的な交渉など幅広い仕事内容をもちクラブの中心的な存在であることが窺える ($\chi^2=202.31$ $df=18$ $p<.001$)。

2) 仕事に対する積極性と運営努力

運営に対して積極的に行動していると回答した人は、WVCで71.7%、JSCでは78.3%、GCでは75.4%であった。

運営努力の内容では、WVCにおいて「メンバーの意見を取り入れる」と回答した人の割合が高く(83.5%)、「専門誌や雑誌などで指導や運営の勉強をした」人が非常に少ない(8.0%)という傾向が特徴的である。JSCでは「他の指導者と交流する努力をする」が72.0%、GCでは「研修会に参加して勉強する」が83.8%で一番高い割合を示していた ($\chi^2=133.0$ $df=8$ $p<.001$)。研修会や他の運営者とのネットワークをつくり、新しい情報資源を入手する努力を行っている人の割合が高いことが窺える。

3. クラブ運営評価

1) 運営の継続-辞退意識と限界観

今の運営仕事を続けたいと回答した人は、WVCで65.4%、JSCで71.2%、GCで68.4%と

高い割合を示した。その理由として、WVCは「クラブを楽しくするため」が一番高く(45.5%)、JSCとGCでは「自分自身の生き甲斐のため」が高い値を示した(32.7%；31.6%)。辞退意識において、満足したので辞めたいという理由に対して、各クラブとも約2割の人が回答した ($\chi^2=36.78$ $df=8$ $p<.001$)。

表3.2に運営面での限界観の結果を示した。回答率20%以上の項目をあげてみると、WVCで「メンバーが受け身的な態度でクラブの仕事が増えている」33.9%、「運営能力が足りないため、いつも不安がある」28.4%、「集まりが悪く活動が続けにくい」25.5%であった。運営

表 3.1 運営に対する継続-辞退意識とその理由

		単位 (%)		
		WVC (n=231)	JSC (n=440)	GC (n=174)
継続	地域貢献のため続けたい	3.9	16.1	17.8
	自分の生き甲斐のため続けたい	16.0	32.7	31.6
	楽しむ場を自分でつくるため続けたい	45.5	21.4	19.0
辞退	満足したので辞めたい	21.2	23.0	20.7
	あまり続けたくないで辞めたい	11.7	6.1	9.8
	すぐに辞めたい	1.7	0.7	1.1

表 3.2 運営に対する限界観

	単位 (%)		
	WVC (n=141)	JSC (n=302)	GC (n=125)
メンバーが受け身で仕事が増加	33.9	19.9	40.0
運営能力が足りないで不安	28.4	16.9	16.0
家庭や仕事の時間との両立ができない	17.7	51.3	31.2
金銭的な自己負担が増えている	4.3	8.9	24.0
メンバー間の人間関係の調整が負担	19.1	8.3	12.8
集まりが悪く活動が維持しにくい	25.5	31.1	32.0

注) この回答は重複回答である

表 3.3 運営に対する喜び

	単位 (%)		
	WVC (n=236)	JSC (n=451)	GC (n=180)
人間関係の拡大、深まり	39.4	28.6	42.8
社会的人間としての成長	21.1	12.9	10.6
クラブメンバーの団結、交流	16.5	47.0	24.4
地域への貢献・交流	3.8	14.0	11.7
健康の維持・増進	5.5	7.5	18.3
運営の役割、苦勞がわかった	8.9	1.8	3.9
生き甲斐や目標ができた	3.0	3.8	11.1
よい活動結果が得られた	5.9	7.5	4.4
情報や知識が広がった	3.8	2.9	2.8

注) この回答は重複回答である

の仕事の増加に伴い自己の能力の限界を感じている。JSCでは「家庭や仕事の時間とうまく両立できない」51.3%、「集まりが悪く活動が維持しにくい」31.1%であった。半数以上の人
が、家庭や仕事の時間との調整に限界を感じている。GCでは、「メンバーが受け身で仕事増

表4 運営行動の許容範囲に影響を及ぼす要因

	責任のもてる運営形態						運営経費の負担の程度					
	A	B	C	D	E	F	a	b	c	d	e	f
WVC	2.4	2.6	2.9	3.3	2.9	2.7	1.7	2.8	3.4	1.5	1.3	1.4
JSC	2.3	2.4	2.7	3.6	3.3	3.1	2.0	3.1	3.5	2.4	1.7	1.7
GC	2.6	2.9	3.1	3.9	3.6	3.5	2.5	3.7	3.7	2.5	2.0	2.1
男性	2.4	2.5	2.8	3.7	3.4	3.2	2.1	3.3	3.5	2.4	1.8	1.8
女性	2.4	2.6	3.0	3.3	2.9	2.7	1.8	2.9	3.4	1.5	1.4	1.4
運営経験ある	2.3	2.5	2.8	3.7	3.3	3.2	2.1	3.2	3.5	2.2	1.6	1.7
運営経験ない	2.5	2.9	3.1	3.3	2.9	2.7	1.8	2.9	3.3	2.1	1.7	1.7
知人依頼	2.4	2.5	2.7	3.6	3.4	3.1	2.1	3.2	3.5	2.3	1.7	1.7
メンバー推薦	2.3	2.4	2.8	3.9	3.6	3.5	2.2	3.4	3.4	2.2	1.7	1.9
行政打診	2.4	2.6	2.8	3.8	3.7	3.4	2.3	3.3	3.5	2.5	2.0	1.9
運営経験ある	2.4	2.5	2.9	3.8	3.6	3.4	2.2	3.3	3.7	2.2	1.6	1.7
年長者	2.5	2.5	2.8	3.8	3.2	3.2	2.2	3.5	3.7	1.8	1.4	1.5
仕方なく	2.4	2.7	3.1	3.5	3.1	2.9	2.1	3.2	3.5	2.0	1.6	1.7
輪番性	2.6	2.8	3.1	3.2	2.8	2.5	1.7	2.7	3.6	1.7	1.4	1.5
押しつけられた	2.8	3.0	3.2	3.1	3.1	2.6	2.0	3.2	3.4	2.1	1.5	1.7
運営に積極的	2.2	2.4	2.7	3.8	3.4	3.3	2.1	3.3	3.6	2.2	1.6	1.7
運営に消極的	2.8	3.2	3.2	3.0	2.7	2.4	1.9	2.9	3.2	2.1	1.6	1.8
専門誌で勉強	2.2	2.4	2.8	3.9	3.6	3.4	2.3	3.4	3.6	2.4	1.8	1.8
研修会で勉強	2.3	2.5	2.8	3.8	3.5	3.3	2.2	3.3	3.6	2.2	1.7	1.8
他指導者と交流	2.3	2.5	2.9	3.7	3.4	3.2	2.1	3.3	3.6	2.3	1.7	1.7
成員意見取入れ	2.4	2.6	2.9	3.6	3.3	3.0	2.0	3.2	3.5	2.0	1.6	1.6
体協行政に依頼	2.4	2.6	2.9	3.8	3.5	3.3	2.2	3.3	3.5	2.2	1.7	1.8
継続したい	2.2	2.4	2.8	3.8	3.4	3.3	2.1	3.2	3.5	2.2	1.7	1.7
辞めたい	2.7	3.0	3.1	3.1	2.9	2.6	1.9	3.0	3.4	2.1	1.6	1.7
仕事増加	2.4	2.6	3.0	3.6	3.3	3.1	2.1	3.3	3.6	2.2	1.7	1.9
運営能力ない	2.6	2.8	3.1	3.4	3.3	2.9	1.7	3.1	3.5	2.1	1.7	1.7
家庭仕事と両立	2.5	2.7	2.9	3.4	3.2	3.0	2.1	3.2	3.5	2.3	1.7	1.7
金銭的負担	2.6	2.9	3.0	3.8	3.5	3.5	2.4	3.7	3.5	2.3	1.8	1.7
人間関係調整	2.6	2.8	3.2	3.1	3.1	2.6	1.9	3.1	3.4	2.0	1.9	1.7
集まりが悪い	2.6	2.8	3.0	3.5	3.2	3.0	2.1	3.2	3.5	2.3	1.7	1.8

A：クラブの仕事断る

B：簡単な仕事なら受ける

C：頼まれれば仕事を受ける中心的役割いや

D：クラブの中心的役割引き受ける

E：クラブ責任者で地域スポーツに協力

F：クラブ責任者で地域や競技団体役員

a：運営経費はすべて自己負担

b：運営経費は多少は自己負担

c：クラブ活動費程度は自己負担

d：不定期に謝金や接待

e：クラブから定期的な謝金

f：クラブ謝金とクラブ外補助金

加」が40.0%, 「集まりが悪く活動がしにくい」が32.0%, 「家庭や仕事の時間との両立ができない」31.2%, 「金銭的な自己負担が増えている」24.0%である($\chi^2 = 267.02$ df = 18 p < .001)。仕事の増加や自己負担金の増加で、圧迫感があり、他の生活時間との調整にも限界を感じている。メンバーの集まりが悪いという限界観は、各クラブ共通の問題であると解釈するのが妥当である。

2) クラブ運営の喜び

表3.3に運営に対する喜びの内容をまとめた。人間関係の深まりは、どの運営者においても高い割合を示した。新しい出会いや友人ができたなど、人間関係の幅が広がり、地域の住民としての意識が高まったとみるのが妥当である。

4. 運営行動の許容範囲の測定

表4に運営行動の許容範囲の結果を示した。責任のもてる運営形態パターンをA~Fの順に社会的責任や仕事の範囲が広がるように配列し、また、運営経費の負担度パターンをa~fの順に経費負担→補助・謝金の受領という連続した内容で項目を配列し、それぞれ3.0ポイントを基点にそれ以上のポイントは肯定的評定で、それ以下のポイントは否定的評定とした。表4にはそれぞれの項目の評定平均値を掲載している。3.0ポイント以上の項目は、その行動基準を肯定的に受け取っている、つまり、そのような行動規範を持っていると解釈できる。

責任のもてる運営形態の許容範囲では、JSCやGCの運営者は社会的責任のある役割にも対応できると考えていると考えることができる。WVCの運営者は、「クラブの中心的役割」が3.0を超えただけで、クラブ内での仕事で十分であると考えている。自主的運営行動をより社会的な範囲まで広げている要因として、①運動経験がある、②運営に積極的、③継続意識があるという個人的特質の要因と、他者からの推薦や依頼を受けて引き受けたという④運営の着任契機が、この責任のもてる運営形態の許容範囲を社会的に広げる、プラスの要因として影響を与えていると解釈することができる。

運営経費の負担度の許容範囲においては、自己負担程度の許容は考えているが、謝金や援助金に対しては否定的な考えを強く持っている傾向が窺えた。

考 察

1. クラブ運営者の自主的運営行動の特徴

(1) WVCの運営環境と自主的運営行動の特徴

徳永(1991)はWVCの活動形態について「過去に運動部に所属していて、技術の高い人ほど勝つことに目標をおく傾向があるが、チームリーガーはチームのメンバーがいつまでも楽しく練習を継続できることを望んでいる。結果的にはチーム全体が競技志向型に傾斜している」と報告している²¹⁾。

本研究の結果からも、同様の傾向がみられた。活動は週2回程度、クラブメンバー数が15人以下の小規模クラブである。どちらかといえば競技力向上の志向が強いというのが平均的なWVCのクラブ形態である。特徴を以下の三点に要約した。

第一に、運営に携わる人数が少ない。1クラブ当たりの運営者数は平均で4.7人であった。これはクラブ規模が小さいクラブが多く、運営内容が限定されているためであると考えられる。

第二に、技術者と運営者(クラブ代表者)とで運営を分業している場合が多いことである。

仕事内容をみると会議出席・行政交渉、メンバー連絡、他クラブとの試合の交渉などチームの内側と外側をつなぐ世話役的な仕事が多く、技術指導を担当している運営者は少ない。これは、森川(1987)が指摘するように、WVCでは技術指導を外部コーチまたは監督に委託している場合が多く、比較的運営と技術指導とが分業化されているクラブが多いためであると考えられる¹⁰⁾。

第三に、運営者は輪番制や仕方なく着任した場合が多いことである。輪番制の場合、運営経験の少ないメンバーが運営者に当てられることもあり心理的に負担感は強い。しかし、運営行動を通じてクラブ全体を知ることができるという利点もある。一定期間努力すれば役を代わってもらえるという意識が働き、クラブ内の与えられた仕事に対しては努力するが、地域全体のスポーツ活動に対する運営には関心が低い。

運営に対する評価として、新しい人間関係、友人の増加、社会的人間としての成長、チームの役にたつといったことに評価を見いだしている。これは運営行動の仕組みが理解できその必要性を認める段階である。このとき仲間から評価されることによってより積極的な活動へと飛躍する可能をもっている。

(2) JSCの運営環境と自主的運営行動の特徴

JSCの活動形態については、森川(1987)¹⁰⁾、中島(1976)²¹⁾ら、多くの研究から、技術指導偏重、競技力向上を活動目標においているクラブが多く、これがJSCの問題点として指摘されてきた。本研究においても、競技会志向のクラブの数が日常ゲーム志向のクラブの数を上回った。活動は定期的に週4回程度で、メンバー数は16~50人のクラブが平均的である。

JSCの特徴としては次の三点をあげることができる。

第一に、運営に携わる人数が平均で7.5人と比較的多く、運営業務を明確に分担している傾向がある。技術指導は指導者であるが、運営に関しては保護者が積極的に運営に携わっているためである。

第二に、JSC運営者の場合、児童が対象ということでスポーツ技術を指導する、遊びを教えるという教育的内容が含まれている。中心となる監督やコーチといった指導者は、技術指導の専門家として保護者から期待されている場合が多い。そのため、専門誌や研修会での情報収集、他の指導者との交流などを通して指導能力の開発に努力を払っている。

第三には、運営者に着任したきっかけが、まずは依頼されたことから始まり、本人の自由意志によって引き受けるかどうかが決まっている点である。運営の仕事において生き甲斐を見つけ積極的に活動している。子どもからの評価、保護者からの評価、地域からの評価が、彼らの運営行動の甲斐性をより強化していると考えられる。それを反映して、地域貢献に対する意識も高く、自主的で責任感をもって運営行動に携わっている。しかし、運営の仕事の増加に対しては消極的で、日常の自由裁量時間のうち、JSCに関わっている時間が大半であり、家庭や職場との両立の苦悩も窺える。

(3) GCの運営環境と自主的運営行動の特徴

GCの活動形態は、他のクラブに比べて日常ゲームを志向するクラブの割合が高く、不定期的な活動をしているクラブが多いことがあげられる。今回の調査では、支部代表者が含まれていたために結果にバイアスがかかり、運営人数やクラブ人数が極端に高い値を示した。これを考慮して考察を加える必要がある。

森川(1987)はゲートボールクラブの活動形態について、「活動の内容が試合中心である。

また、プレーヤーよりもゲームを取り仕切る審判員が最も花形であるという極めて異形のスポーツである」と指摘している¹⁰⁾。運営の仕事内容から検討すれば、技術指導からクラブ運営まで多くの仕事を抱え、審判有資格者＝技術指導者＝クラブ運営者という図式が明らかになる。また、幹部経験年数が平均で10.6年と運営経験が豊富であり、クラブメンバーから推薦されて着任した傾向が強く、クラブの様々な仕事が一任されていると考えられる。

運営行動の特徴をあげれば、第一に、審判員の資格を持った人に、技術指導とクラブ運営のほとんどが委ねられている。代表者ひとりに仕事が集中しているため、運営能力を高めるため多くの努力を払っている。

第二に、地域に貢献しているという意識が強い点である。運営活動はかれらの生き甲斐のひとつであり、仕事に対して責任をもって積極的に行動している傾向が強い。

第三に、運営に関する障害を強く感じている。運営業務が一人の人に集中すると、メンバーは受け身的になり、それが原因で運営者の仕事量が増え、限界観を増幅させていると考えられる。

2. 自主的運営行動の行動範囲を規定する要因の検討

1) 責任のもてる運営形態の許容範囲について

運営形態に対するの責任の許容範囲は、所属するクラブの活動形態によって異なる。WVC運営者は、主にクラブ外技術指導者の補佐的な仕事や、クラブ代表としての渉外関係の仕事が多い。そのため自主的運営の対象はクラブ内に留まり、地域スポーツ組織への参加には消極的な運営者が多い。JSCやGCの運営者は、クラブメンバーやクラブ関係者から依頼、推薦されて着任した傾向が強いため、運営能力の向上に努力し、より積極的に地域スポーツへ貢献しようとする意識が強い。

個人的レベルから運営形態の許容範囲に影響を与えている要因を検討してみる。運営者個人の積極性の有無、継続意識の有無、運営者着任の契機が許容範囲の決定に強い影響を与えている。クラブ運営者の決定の際には、ボランティア・スポーツ指導者としての本人の自覚と自信、クラブメンバーの承認、信頼関係を重視する必要があると思われる。許容範囲の高い運営者は、積極的にクラブ運営行くと共に、地域スポーツにも関心を持ち、広範囲での運営行動にも関わっていきける可能性を示唆した。

限界観と許容範囲との関連を考察してみる。クラブ内運営の許容範囲を示した運営者の場合、①クラブ内の人間関係調整が困難、②運営能力がないので不安という問題が起こっている。また、クラブから地域スポーツ組織への関わりまで許容範囲を広げた運営者の場合は①金銭的自己負担、②仕事量の増加、③メンバーの集まりが悪い、④家庭や仕事との両立が困難という問題が起こっている傾向が窺えた。地域スポーツの展開で、ボランティア・スポーツ指導者を活用しようとする場合、この指導者の特性に合わせた補助対策を考え、運営活動が円滑に行える環境を整えていく必要がある。

2) 運営経費の負担度の許容範囲について

ボランティア・スポーツ指導者の場合、所属クラブの活動形態、運営行動やクラブ運営観では、運営経費の負担について差がみられなかった。ほとんどの人が、「運営に関わる仕事なので多少なら自己負担してもよい」、「自分のクラブ活動にかかる経費くらいは負担する」という意見に肯定的な反応を示した。クラブからのお礼や接待、謝金という有償ボランティア的な内容に対しては、強い否定的反応を示した。これは、自主的クラブ運営は無償で行うも

のという観念が支配していることを示唆した。しかし、多少でも自己負担している運営者は、金銭的負担の増加を運営の限界の理由としてあげる傾向があり、運営経費の財源、運用の仕方等が、自主的運営行動の展開を考えていく上で重要な要因と考えられる。

3. 自主的運営行動とボランティア活動について

一般にボランティア活動とは「動機に注目するならば、他者を助けたいという愛他主義に基づく行為であり、経済的報酬を伴わない贈与としてとらえられ、一方、活動に注目すれば、自己実現や学習の機会となるとともに社会的連帯感を強める機能があり、心理的な報酬が介在する」活動であると考えられている⁹⁾。この視点から考察すれば、ボランティア・スポーツ指導者の自主的運営行動は、広義の意味でボランティア活動として捉えることができる。

また、岡本(1980)は自発性、無償性、公益性をボランティアの三条件として提示している¹⁰⁾。自発性は運営者の着任契機に影響されている。依頼や推薦によって着任した運営者と輪番制や仕方なく着任したという運営者では、意識や行動に違いがみられる。前者の場合、着任契機は他者からの依頼であったとしても、依頼に応ずるかどうかは本人の自由意志に委ねられているので、自発的意志に基づいて行動していると捉えることができる。後者の場合、クラブ会員であるために役割を押しつけられたという認識が強く、その運営行動は消極的で継続意識の低いので、自発性は低いと判断するのが妥当である。無償性の観点から考察すると、運営者は自主的運営行動に対する金銭的、物的報酬や謝礼を受けとらないという観念が強い。逆に、GC運営者のように運営経費の自己負担を仕方なく認める観念も存在する。クラブの自主的運営行動は、無償性の強い行動であると捉えることができる。公益性の観点に関しては、JSCやGCの運営者は地域との交流が深く、その自主的運営行動は社会的にも評価されているので地域に貢献している意識は強い。自分のクラブの自主的運営行動がそのまま社会的貢献であるとは考えてはいないが、地域のスポーツの発展に対する意識は高い。

クラブの自主的運営行動は、広義の意味でボランティア性の高い行動であることが示唆された。しかし、地域スポーツクラブのような自主的団体(voluntary association)の成立過程において、ボランティアな運営行動は必然的に存在する¹⁰⁾。これを、そのままボランティア行動として捉えていいものかどうかは議論の余地が残る。また、地域スポーツクラブの発展において、複雑化する運営形態の変化に自主的運営者のボランティア性だけで対応できるのかという疑問がある。社会的中間組織としての制約や責任、義務等の中で、運営者個人の善意による自主的運営行動がどの程度生かされ、発展性のあるものか、運営者のライフスタイルを考慮して研究していく必要がある。

付記：本研究の調査実施にあたり、徳島大学総合科学部の生田豊教授、徳島県及び岡山県のスポーツ少年団本部、家庭婦人バレーボール連盟事務局、ゲートボール協会事務局に多大なるご協力を賜った。謹んで感謝の意を表す。また、本研究は文部省科学研究補助金(奨励研究A:05780074)の助成を受け、Asian Sport Sciences Congressで発表した内容の一部を含んでいる。

参 考 文 献

- 1) 堀田力(1999)“縦型社会”から“横型社会”の時代へ 窓20 窓社 pp.52-64
- 2) Jackson, J. M. (1965) Structural Characteristics of Norms. In Steiner, I.D. & Fishbein, M. (eds)

Current Studies In Social Psychology. Holt, Rinehart & Winston

- 3) 小久保信幸 (1993) 地域スポーツ活動の社会的機能に関する実証的研究—「地域運営」とスポーツ活動の接点をめぐって—日本体育学会第44回大会大会号 pp. 170
- 4) 糸野豊, 佐伯聡夫 (1985) 現代スポーツ指導者論 ぎょうせい
- 5) 巡清一 (1986) 青少年問題とボランティア活動 日常出版
- 6) 巡清一 (1987) 老人ボランティア活動入門 川島書店
- 7) 松本耕二, 野川春夫, 菊池秀夫, 池田勝 (1992) ボランティア活動への参加動機に関する研究 日本体育学会第43回大会大会号 p. 145
- 8) 松尾哲矢, 多々納秀雄, 大谷善博, 山本教人 (1994) ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究: 指導者への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について 体育学研究 第39巻 第3号 pp. 163-175
- 9) 森岡清美, 塩原勉, 本間康平 (1993) 新社会学事典 有斐閣
- 10) 森川貞夫 (1987) 地域に生きるスポーツクラブ 国土社
- 11) 森川貞夫 (1990) 地域スポーツの新しい展開 体育科教育1月号 大修館
- 12) 小川剛 (1994) 思想としてのボランティア 窓20 窓社 pp. 153-160
- 13) 岡本包治 (1980) 社会教育ボランティア—発掘・養成・活用 ぎょうせい
- 14) 大橋美勝, 安田朋則, 佐藤充宏 (1987) 地域スポーツクラブの現状と課題 岡山大学教育学部研究集録第76号 pp. 149-181
- 15) 大橋美勝, 団琢磨, 佐藤充宏 (1990) 地域スポーツクラブ連合の形成過程の研究 岡山大学教育学部研究集録第85号 pp. 89-100
- 16) 佐々木薫 (1966) 欠勤に関する職場規範の研究 日本心理学会第30回大会発表論文
- 17) Sato, M., Y. Mikawa & Y. O'hashi (1994) Voluntary action in the management of community sport clubs. Abstract for Asian Sport Sciences Congress, Hiroshima '94. 409
- 18) 佐藤慶幸 (1991) 女性たちの生活ネットワーク 文真堂
- 19) 末廣剛志, 川西正志, 宮田和信 (1994) 少年スポーツ指導者のスポーツ的ライフスタイルによる類型化 日本体育学会第45回大会大会号 pp. 165
- 20) 徳永敏文 (1993) 個人の能力の社会への還元, 団琢磨, 大橋美勝編, 学校五日制と生涯スポーツ, 不味堂
- 21) 徳永敏文 (1991) 女性バレーボールクラブ・メンバーのスポーツ観について 体育学研究 第36巻第2号 pp. 157-170
- 22) 山本英毅, 中島豊雄 (1976) 新しい社会体育指導者像 体育社会学研究5 道和書院
- 23) 綿祐二 (1992) 障害児キャンプにおけるボランティア活動の継続性に関する研究: 役割理論適用による役割に伴う活動に対する自己評価と継続性との関連 東京都立大学体育学研究第17号 pp. 37-44
- 24) 綿祐二 (1994) 社会福祉領域におけるスポーツボランティアに関する研究—スポーツボランティアの日米国際比較—日本体育学会第45回大会大会号 pp. 183